様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０３３６６

研究課題名（和文）熊本県山鹿市の歌舞伎（式）劇場・八千代座に関する総合的史料研究

研究課題名（英文）Comprehensive historical materials research of Yachiyoza, a Kabuki theater in Yamaga city, Kumamoto prefecture

研究代表者
山崎　浩隆（Yamasaki, Hirotaka）

熊本大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：２０５５５７６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,400,000円

研究成果の概要（和文）：熊本県山鹿市の八千代座は、明治44年1月に山鹿の実業会により建設された江戸後期様式の歌舞伎劇場である。本研究では、八千代座の活動を、興行史料、学校史料、新聞記事、記憶遺産等を調査・同定するとともにイタリアでの国際シンポジウムや熊本大学でのシンポジウムを通して、洋楽受容、演劇、教育、芸能、娯楽、音楽家の移動といった様々な検討軸から地方での文化展開とその推移を明らかにした。このことから、八千代座は情報を市民に伝える、という役割を担う現在の公共ホールに近い存在であったことも明らかになった。また研究を進めるにあたり、シンポジウムをはじめサイレント映画上映会などの公開事業を行い、研究成果を公開してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
八千代座の在り方を通して“地方”の劇場の役割を検討することにより、地方劇場の果たした役割が以下のように明らかになったことである。
まず、細分化されたジャンルに対応した都市部における劇場や芸術としての芸能（神楽、能楽、歌舞伎）を通して語られてきた“日本の劇場”像とは異なり、道徳や新しい思想、ニュースを伝えるメディアとしての役割を担い続けていたこと。また、明治維新以降、“地方”は独自の富と文化を持っており、統一国家を目指した政府が“国民”意識を育てるために、地元密着型劇場は大きな役割を果たしたこと。

研究成果の概要（英文）：Yachiyoza in Yamaga City, Kumamoto Prefecture is a Kabuki theater built in January 1894, by the Yamaga Chamber of Commerce and Industry. In this research, we investigate and identify activities conducted at Yachiyoza, including historical materials, school materials, newspaper articles, memorial heritage, and so on. Also, through international symposia in Italy and symposia at Kumamoto University, Western music reception, theater performances, education, entertainment events conducted at the theater have been studied. We clarified the local cultural development and its transition from various points of view such as entertainment, movement of musician, and so on. The research also reveals that Yachiyoza is located close to the present public hall that plays an important role in transmitting information to citizens. While conducting research, we held public projects such as organizing symposia and silent film screenings. We have also made the results of the research public.

研究分野：音楽教育および音楽教育史

キーワード：音楽史　音楽学　音楽教育史

1.　研究開始当初の背景

本研究は，この地域における基礎教育の充実が劇場の導入をもたらし，また劇場が国民を作る教育的な場であったとの観点から，劇場史料の同定，解明を行い，社会や学校が劇場に託した意図，そして劇場がどのように社会，学校教育において用いられていたのか，近代化の後に各地で急速に始まる独自の「日本化」によって特色付けられる大正期以降の日本社会における劇場のあり方を解明するものである。おそらく，この研究より導き出される劇場のあり方の歴史的変容は，他者との対立，比較を利用した“国民国家意識”の涵養と密接に関わる種々の社会・文化の動きと関連して位置づけられるものとなろう。またその変容は日本各地や海外の劇場，芸術教育の歴史の動向と比較することで何らかの共通するあり方を見出すことができるはずである。史料に関わる克明なデータベースの作成は，このような広い文化コンテクストの中で八千代座の栄枯盛衰モデルを描くための最初のアプローチとなる。

２．研究の目的

本研究の目的はおよそ次の 3 点である。第 1 に，未整理史料群の確定とそのデータベース化，および史料保存への道筋を立てること。第 2 に，同劇場で演じられていた作品内容（ジャンル，歌詞，音楽）の同定の可能性を，興行側の史料の調査，照合とともに試みる点である。具体的には，「学校史料」から「学芸会」と当時の音楽教育のありかたを，また「ポスター」より「活動写真」や「少女歌劇」の内容等を明らかにできるのではないかと考え，従来の「歌舞伎研究」「芝居研究」の枠外から「歌舞伎式劇場」を再考することである。第 3 に，様々な学術的・教育的アウトリーチを，自治体と協力して行う点である。八千代座上演レパートリーの中から作品の実態がある程度判別でき，今日「復元」が可能と考えられる学校唱歌，活動写真（映画）の作品の「再現」を同劇場はじめシンポジウム等で行うアウトリーチ活動は，地域文化の再評価，立体的な史料研究の試み，さらには新しい歴史教材開発となりうるのではないかと考えた。

先の基礎調査の成果は，綿密ながら郷土史の範疇に留まっていた。そこで共同研究者に古い作品の「学術的復活上演」，「実演」に関わって問題意識を共有している専門家，宮本圭造（能楽），奥中康人（軍楽隊），山田高誌（古典オペラ），森みゆき（明治期の唱歌），國枝春恵（作曲）が加わり，その演奏された当時の再現，あるいは再創造を目指し，作品が持っていた同時代的な意味を多面的に検討することも目的とした。

本研究はつまり，八千代座の活動を，興行史料，記憶遺産，ポスターより同定，その後，政治，洋楽受容，演劇，教育，娯楽，音楽家の移動といった様々な検討軸から地方での文化展開とその推移を明らかにし，最後に再現上映会を通して地域住民，県下の学校における芸術，歴史教育としてのアウトリーチを行う，総合的な研究を目指してきたのである。

３．研究の方法

本研究は三つの方向から進めた。

一つは劇場の史料研究である。劇場に残る会計文書や当時のポスター，内部で使われていた道具類といった“一次史料”の多くは，改装前の段階で設立された資料館「夢小蔵」に移管展示されており，その一部は先行研究『八千代座 100 周年記念誌』に転載されているものの，同資料館にはそれら収蔵品一覧表も翻刻もなく，学術的見地からの調査は行われていないのが現状であった。これは研究分担者の春田直紀を中心に，研究協力者であり山鹿市文化協会会長の木村理郎とともに劇場史料群を中心に整理および奉納額や劇場内に残る落書等の翻刻を行った。併せて，地域の高齢者への聞き取り調査も行った

二つ目は学校史料研究である。公的な団体故に，ある程度史料が残っていると考えられる「学校史料」に注目を寄せ，山鹿市，および熊本県下の尋常小学校，旧制中学，女学校，および熊本大学教育学部の前身となる師範学校の現存史料の調査を行い，そこで行われていた音楽教育，芸術教育を具体的に明らかにする中で，八千代座等劇場が地域の子どもたちに及ぼした文化的影響について明らかにした。

三つ目は，中央から見た地方劇場研究である。熊本の劇場にどのような“中央の音楽”がもたらされていたのか，地方劇場である八千代座と中央の劇場との比較を通して，明治末から戦前にかけての地方劇場の機能を明らかにした。
これら三つの方向から進めた研究はその内容を年度ごとにシンポジウムを開催し，地方劇場の果たしてきた役割についてより多角的に捉えるとともにアウトリーチとして成果を公表してきた。

４．研究成果

八千代座は現在歌舞伎で有名ではあるが，建設した当時は，柿落しの他，昭和前半までにわずか数回しか歌舞伎の公演は行われておらず，主に連鎖劇，浪花節，新派劇，少女歌舞伎，舞踊，肥後琵琶，さらに西洋楽器バンドの演奏会や活動写真の上映，奇術やボクシング類の興行，ほか株主集会や軍事演説会など様々な目的のために用いられ，収益事業であるとともに情報を市民に伝える，という役割を担う現在の公共ホールにとても近い存在であったことが明らかになった

八千代座は江戸時代の役所である「手永会所」の跡地に建てられており，その地理的要素からその公共的役割が示されるが，さらに，この劇場を建築し，初代興行師として経営を行った木村亀太郎（1759-1940）は，佐世保と一説には上海で西洋建築を学んだ後に山鹿尋常小学校校舎等公共建築を手掛けた建築家であったことから（木村理郎「近代の山鹿の偉人たちシリーズ 021 ～木村亀太郎～」山鹿市教育委員会，2013），西洋建築，そして公共建築の意義と役割を理解した上で，あえてこの土地に合うスタイルを選んだと考えられる。

当時，劇場は一般的に“悪所”とみなされていたが，山鹿地方における八千代座はそうでなく重要な文化拠点となっていた。というのも当時，熊本市内にもいくつもの劇場があったのだが，学校の学芸会を劇場で行った記録はまったくない。しかし，山鹿では建設当初から学芸会を終日行っている。また，今日のように各家庭向けのマスメディアのない時代にあって，様々な楽器の音が劇場内外に鳴り響き，日本音楽，西洋音楽と様々な音楽が演奏されていた八千代座は，山鹿の市民，子どもたちにとって重要な文化拠点であったことが明らかになった。

さて，八千代座は現在，「全国芝居小屋協議会」の一員として明治・大正期に建てられた国内各地に現存する 18 の劇場とゆるやかな連携を取っているが，当時も決して独立した存在ではなく，木村亀太郎の明治・大正期の 178 点の私信類の検討より，彼が熊本市内の大和座，菊池隈府の桜座，ほか大阪の劇場などと連絡を密に取りながら，ニーズとコストのバランスの上で興行を行っていたことが明らかとなった。

このような八千代座の在り方を通して“地方”の劇場の役割を検討すると，細分化されたジャンルに対応した都市部における劇場（能舞台，歌舞伎座，活動写真館，奏楽堂）や芸術としての芸能（神楽，能楽，歌舞伎）を通して語られてきた“日本の劇場”像とは異なるばかりか，むしろ，ヨーロッパの諸劇場が，18，19 世紀にはオペラと演劇を通して，また第 1 次大戦後にオペラが下火となった後は，座付きオーケストラをそのまま伴奏役に雇い無声映画の上演を行うことで，一貫して道徳や新しい思想（啓蒙思想，人権など），ニュースを伝えるメディアとしての役割を担い続けていたこととよく似通ったものであったことが見えてきた。

明治維新以降の日本の人口 10 位都市リストに，金沢，新潟，呉，北九州などとともに熊本（白川県）が入っていたように，今の私たちが思う以上に“地方”は独自の富と文化を持っており，統一国家を目指した政府は，そこに住まう人々にどうコミットし“国民”意識を育てるかという問題解決のため，地元密着型劇場はなにより大きな役割を果たしてきたのである。

以下に，これまで本研究グループが文部科学省科学研究費の補助のもと行ってきた公開事業を示す。

＜熊本大学八千代座研究グループによる八千代座に関する取り組みとアウトリーチ＞

日時	場所	内容	名称	登壇者等（敬称略）
2016.9.12	熊本大学	シンポジウム	地域文化拠点としての劇場	安田宗生（熊本大学名誉教授），木村理郎（山鹿市文化協会），山﨑浩隆（熊本大学），山田高誌，佐藤慶治（九州大学），春田直紀（熊本大学），宮本圭造（法政大学能楽研究所），塚原康子（東京芸術大学），奥中康人（静岡県立文化芸術大学），森みゆき（尚絅大学短期大学部）
2016..12.7	八千代座	演劇公演	熊本大学・日伊修好 150 周年記念事業実行委員会主催　ボローニャ・フラテルナル劇団　即興仮面喜劇《ドン・ジョヴァンニ　蘇った石の招客》	フラテルナル・コンパニア（ボローニャ），エドモンド・フィリッピーニ（イタリア文化会館大阪），山田高誌
2017.3.5	熊本大学	シンポジウム	地方における国民形成と芸能～劇場，学校，地域共同体	細川周平（国際日本文化研究センター），山﨑浩隆，山田高誌，塚原康子，奥中康人，國枝春惠（熊本大学）
2017.8.5～6	八千代座，千代の園酒造，天聴，他	熊本大学教育学部日本史春田ゼミによる史料調査	熊本大学教育学部・日本史春田ゼミ合同合宿調査旅行	春田直紀，山田高誌，水野裕史（筑波大学），教育学部生，大学院生，野中元（写真家）ほか
2018.3.13	在ローマ国際交流基金日本文化センター	国際シンポジウム	*Funzionamento del teatro "locale" in Giappone sotto il "nuovo governo" Meiji e Taisyo* 明治，大正期における地方劇場の役割	山田高誌，ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア大学日本学科），木村理郎），山﨑浩隆，塚原康子，宮本圭造，春田直紀，國枝春惠（熊本大学），森みゆき
2018.9.1	八千代座	映画鑑賞会とシンポジウム	「八千代座に蘇るサイレント映画たち」（熊本大学教育学部，早稲田大学演劇博物館，一般財団法人山鹿市地域振興公社主催）	[基調講演] 木村理郎，中村青史（くまもと文化振興会理事長）；[シンポジウム] 山田高誌，山﨑浩隆，児玉竜一（早稲田大学演劇博物館副館長），柴田康太朗（早稲田大学演劇博物館），神田由築（お茶の水女子大学），上田学（神戸学院大学）；[弁士] 片岡一郎，山内奈々子; [演奏] 湯浅ジョウイチ，古橋ゆき　他

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 山﨑浩隆　「大正・昭和初期の学芸会にみる熊本・山鹿の劇場の役割」熊本大学教育学部紀要 第 66 号，2017，163-173，査読無

② 山﨑浩隆　「大正・昭和初期の子どもの文化形成における地方劇場の役割：熊本県山鹿市に現存する八千代座の記録と記憶をもとに」熊本大学教育学部紀要 第 66 号，2018，143-148，査読無

③ 森みゆき「明治期の熊本の新聞における西洋音楽関連記事調査⑤－九州日日新聞　明治 41～45 年－」尚絅大学研究紀要 人文・社会科学編　第 51 号，2018, 93 - 159，査読無

④ 塚原康子 「熊本県山鹿市八千代座の演目種別から見えてくるもの－明治・大正・昭和戦前期の地域劇場に響いた音楽ジャンル－」東京藝術大学音楽学部紀要 第 44 集，2019，85-104，査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

① 山﨑浩隆 「大正・昭和初期の学芸会に見る熊本・山鹿の劇場の役割」第 42 回日本教育大学協会全国音楽部門大学部会 2017.5.13，熊本市国際交流会館

② 宮本圭造 「For whom is noh staged? Training for the actors or performance for the audience?」(the 15th International Conference of the EAJS, The world of Noh: three aspects of its socioeconomic structure, 2017.8.31, リスボン新大学) 「「歩行」に始まり「歩行」に終わる－比較演劇的観点から見た日本の伝統演劇の特質－」ストラスブール大学国際研究集会「Corps et Message」，2018.3.22，ストラスブール大学

③ 山﨑浩隆 「大正・昭和初期の地域の子ども文化形成における劇場の役割」日本音楽教育学会第 49 回岡山大会，2018.10.6，岡山大学

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：山田 高誌
ローマ字氏名：Yamada Takashi
所属研究機関名：熊本大学
部局名：大学院人文社会科学研究部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：10580665

研究分担者氏名：國枝 春惠
ローマ字氏名：Kunieda Harue
所属研究機関名：熊本大学
部局名：大学院人文社会科学研究部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80284719

研究分担者氏名：春田 直紀
ローマ字氏名：Haruta Naoki
所属研究機関名：熊本大学
部局名：大学院人文社会科学研究部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80295112

研究分担者氏名：塚原 康子
ローマ字氏名：Tsukahara Yasuko
所属研究機関名：東京藝術大学
部局名：音楽学部
職名：教授

研究者番号（8 桁）：60202181
研究分担者氏名：奥中 康人
ローマ字氏名：Okunaka　Yasuto
所属研究機関名：静岡文化芸術大学
部局名：文化政策学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：10448722

研究分担者氏名：宮本 圭造
ローマ字氏名：Miyamoto　Keizo
所属研究機関名：法政大学
部局名：能楽研究所
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70360253
研究分担者氏名：水野 裕史
ローマ字氏名：Mizuno yuuji
所属研究機関名：筑波大学
部局名：芸術系
職名：助教
研究者番号（8 桁）：50617024

研究分担者氏名：森 みゆき
ローマ字氏名：Mori Miyuki
所属研究機関名：尚絅大学短期大学部
部局名：幼児教育学科
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00738552

研究分担者氏名：佐藤 慶治
ローマ字氏名：Satou Keiji
所属研究機関名：精華女子短期大学
部局名：幼児保育学科
職名：講師
研究者番号（8 桁）：10811565

(2)研究協力者
研究協力者氏名：木村 理郎
ローマ字氏名：Kimura Riro

※科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。